

A 4 7 / 0 8

地域に根差した学校における国際人育成のための カリキュラム・デザイン

寺 口 浩 (神戸女学院中学部・高等学部)

1. はじめに

本稿では、グローバル社会、ボーダレス社会の担い手となる日本の若者たちの成長の場である私立学校が、どのようなコンセプトに基づいてカリキュラム・デザインを行うべきかを考察する。遅々として動かない公教育の前で、私立学校ならではの機動力を発揮し、未来を拓く教育の展開を描いてみたい。

2. 私学が独自性を発揮するには

(1) 公立学校による教育の「補完的」役割とは

文部科学省は、私立学校に対して「公教育の補完的役割」しか割り当てていない。しかし、私立学校には公権力から独立した、私学ならではの独自性がある。公立学校にできないこと、それこそ私学にしかなれないことなのではないだろうか。

例えば、小中高をすべて持つ私立学校の中には、12年一貫教育の強みを活かして、近年4・4・4というカリキュラムを取り入れ始めているところがある。また、最近、脳科学の発達から再評価されている男女別学。この流れをしっかりと受け継いでいるのも圧倒的に私学である。

教育に携わる者は思いあがってはいけない。親でさえ、子どもを自分の思い通りにしてはいけないのであるから、まして学校は、生徒の「個」の成長を尊重して、教育を行わねばならない。子どもを学校に強制的に集めて、間違った愛国心などを刷り込もうとしたりしてはいけないのである。

教育は、親の仕事のアウトソーシングであるから、親の子育てを手伝うこと、もっと正確に言えば、子育てを親と協力してどう支援するか、ということが学校の至上命題であると私は考えている。

以上のような観点からすると、「私学は公教育の補完的役割を担っているにすぎない」という位置づけは間違っていると言えよう。逆に、私学の教育こそが、正統な教育と言われてしかるべきだと確信するのである。

(2) 国際化時代にあって地域に根ざした学校カリキュラムとは

兵庫県西宮市をご存知だろうか。阪神間にある人口約48万のベッドタウンで、甲子園球場がある。もし、西宮に在る中学校や高等学校が、生徒に西宮のことしか教えないとしたらどうだろうか。読者

諸氏は、それがおかしいと簡単に判断するであろう。仮に兵庫県や近畿のことだけしか教えないとしても、十分な教育をしているとは言えない。同様に考えると、未来の世界を担う生徒たちに、日本のこと、アジアのこと、世界のことを教えずして、十分な教育をしているとは言えないというのが自明であるとお分かりいただけると思う。

今日の国際化時代とは、世界の人々の相互依存が高まっている時代である。私たちが日常消費している食料品、衣料品の原産国を確かめてみれば、それがチリ沖で取れた魚やイスラエル産の果物であったり、ベトナム産の下着やバングラデシュで縫製されたポロシャツだったりする。こんな世界に生きている生徒たちが、イスラエルがアラブと戦争していること、バングラデシュが洪水と貧困に悩んでいることを知らずして自分のライフ・デザインをしてよいのだろうか。

今回の研究で私が「地域に根ざした学校」にこだわったのは、インターナショナル・スクールや帰国生受け入れ専門校のように、もともと複数の文化を体験的に知っている生徒たちがたくさんいる環境ではなくて、一般の学校で学ぶ中学生、高校生に、いかにして日常的に国際感覚を身につけてもらうカリキュラムを提供できるかを問題にしたかったからである。

このような視点で教育を進めることは、公立学校には、少なくとも現時点では無理だと思っている。公立学校は、結局のところ、日本という枠から出られない宿命を帯びている。国家としての日本の枠から自由に出ることができるのは、学校教育においては私学において他にはないと思うのである。

(3) 新しいカリキュラムの構築に向けて

「個」「アイデンティティー」「プライバシー」… こういった概念が日本の文化・社会で取り上げられるようになったのは最近である。そして実のところ、日本人は、本当の意味で、これらの概念を理解しているとは言えないのではないか。

学習指導要領が、生徒ひとりひとりの「個」としての成長を考慮に入れて編纂されたのは1993年が初めてであった。以後20年近く経過しているが、果たして学校現場で、生徒ひとりひとりの「個」としての成長を基本に据えた教育活動が行われているであろうか。

空港ターミナルでの出来事。ある公立中学校の生徒たちは、ターミナルの出入りを塞ぐ形で並ばされていた。私が出入り口を通りたくて迷っていると、近くの生徒たちが道を空けようと動いてくれた。それに対し、間髪入れず、「そこ、何動いているんだ！列を乱すな！」という怒声が浴びせられた。生徒は、自分の考えで動いてはいけないのである。「先生の言ったとおり」に動いて当たり前で、「先生が言ったとおり」に動かなければ制裁が彼らを待っているのである。

すべての公立がこうで、私学がそうではないと言っているわけではない。また、すべての教師がこのようだと言っているのでもない。私は、この例を参考に、私たち学校の教師が日常やっていることを振り返ってみたいだけである。

現政権は、「平成の開国」を掲げている。この言葉は、ある意味現在の日本の状態を認識し、将来を見据えていると思う。国際社会の中で、日本が日本の独自性を持ち続けながら、重要なメンバーのひとつとして活躍し続けるためには、目の前のことだけにしか視野の及ばない教師が、生徒を目の前のことだけにしか視野の及ばない人間に育てていたのではだめだということだ。

今年の1月、全国の私立中学校、高等学校500校に、国際的な視野を生徒に持たせるための取り組みについてアンケート調査に協力していただいた。回答を寄せてくださった85校のご協力に感謝しつつ、その結果を考察したい。

多くの学校が、英語の授業にネイティブ・スピーカーを迎え、英会話やティームティーチングを実施していること、また修学旅行の行先に外国を選んだり、短期の海外研修プログラムを組んでいること、外国の学校の生徒を受け入れたり、交流行事を行っていることなどがわかった。

ただ、こうした「英語授業の枠内での取り組み」や「単発的イベント」とは別に、日常的に生徒の国際感覚を養うプログラムを実施している学校は、それほど多くないと分かった。その例をアンケートに基づいて行った調査訪問を報告する形でご紹介したい。

調査訪問には、3つの学校にご協力いただいた。

一つ目は、広島工業大学高等学校（広島県）である。この学校では、英語の授業とは別にライフ・スキルという授業を展開している。これは、学校が東京のJapan International Education Center（JIEC）と提携し、JIECのスタッフであるカナダ人講師が、JIECの基本プログラムを学校にカスタマイズしながら運営している授業である。生徒たちは、毎週英語で、生活体験をしている。グループ・エクササイズ、ミニ・サバイバルキャンプ、環境やエネルギー問題に関する調べ学習とプレゼンテーションなど、多彩な内容を生徒たちの力に見合った英語で体験的に習得してゆく、コミュニケーション・ベースのプログラムである。

二つ目は、順天中学・高等学校（東京都）である。この学校では、生徒たちが学校に入れ替わり立ち代り外国人の生徒を迎えていることで、国籍の違う生徒と生活をともにすることが日常化している。また、株式会社KA教育の提案のもと、土曜日を利用して、教科横断的な特別活動を実施し、その中で、発言発表力やディベート力をつけるグループコミュニケーション（中1～高3）、企画力、研究力、プレゼンテーション能力、論文作成能力をつけるテーマ研究（高1～高3）などを展開している。現在すべて日本語で行っているが、今後少しずつ英語でもできるようにプログラムを改良中とのことである。

そして三つ目は、大東文化大学第一高等学校（東京都）である。この学校では、1年生（特進クラス以外）に必修、2、3年生は選択で中国語の授業を行っている。2年生で全員中国へ5泊6日の修学旅行に出かける。この時、1日北京にある高等学校との交流行事を行っている。生徒たちの多くは、小学校時代から外国籍の子どもと机を並べて学ぶ経験を持っているし、中には本人が外国籍の生徒もいるので、中国語を学んだり、中国に行ったりすることにそれほど違和感を持たないそうである。中国以外にも、ニュージーランドとカナダにある姉妹校との短期相互訪問プログラム（希望者対象）があり、それぞれの国を隔年で訪問している。

3. まとめに代えて

世界は常に動き、社会は常に変わっている。だからこそ、この世界、社会は生きていけると言えるのではないか。イエズス会士曾根忠明神父は、「人は代謝しているから生きています。代謝をやめたらそ

の人は死んでいる。組織も社会も、代謝をやめて固定化すれば、それはその組織、社会の死を意味するのだ。」と語った。

学校は、前の時代の知見や価値体系を次の世代に刷り込む場なのだろうか。確かに、人間は先達が発見し積み重ねて来た知識と技術を後世に伝えることで発展、進化して来た。しかし、先達の後をトレースするだけでは、人間の発展、進化はなかったのではないか。そこに、今を生きる者の独創性や冒険心、型を破る行動があって初めて、我々人間は発展、進化して来たのであろう。

そう考えれば、学校は、前の時代の知識や技術、価値観などを後世に伝えるだけの場では不十分である。私たちの学校で学ぶ生徒たちは「未来からの留学生」、すなわち、未来を創り、未来を支え、未来で活躍する人間である。私たち学校を営む者は、彼らが未来で飛翔する姿を目に浮かべながら、彼らの育ちを支援する者でなければならない。

子どもたちの目線で見れば、学校は日常である。生徒たちには、自分の学校の社会的な位置を確認したり、他の学校と比べて評価したり、自分が学校で営んでいる生活を俯瞰的に分析したりすることはできない。それだけに教員の負うべき責任は大きい。まず、教員が世界の中での自らの立ち位置をしっかりと確認し、世界の進むべき方向をとらえ、生徒たちに指し示すことから始める必要がある。

私学の強みは何か。それは、グローバル社会、ボーダレス社会にあって、国家という小さな枠に囚われない自由を有していることだと思う。私学に働く私たちにその自覚と誇りがあれば、後はそんなに大それたことをしなくてもよい。足元の小さなことから手をつければ間違ふことはあるまい。

なぜ、英語の授業にネイティブ・スピーカーを招くか考えたことがあるだろうか。なぜネイティブ・スピーカーでなければならないか考えたことがあるだろうか。なぜ修学旅行の行先を外国にするかきちんと検討されているであろうか。外国に行ったことが自分たちの将来にどう関わっているか生徒たちに自覚できているだろうか。なぜ留学生を受け入れているのか。受け入れた留学生が自校の生徒とどのような関係を築けるように支援しているだろうか。こういった問に対して、明確な答えを用意できていれば、私たちの地道な努力の積み重ねが実を結んで来ると確信する。

英語でなくてもいい。英語でもネイティブ・スピーカーでなくてもいい。外国に生徒を連れて行くに越したことはないが、日常的に異文化体験ができるようなプログラムが用意できるなら、外国に行かなくてもいい。外国人が日常的に学校にいてくれるというのは恵まれているが、たとえいなくても、異文化を理解しようとする態度を育て、そこから価値観を相対化できる視点が持てるように導き、世界の平和に貢献できる人格を育てるという目的がはっきりしていれば、どんなプログラムでも効果を発揮するはずだ。

結論として述べたいのは、私たち教師自身が意識を変え、常に世界の中のアジアの中の日本を意識して自ら今日を生きる。その生きる姿勢を賭けて、カリキュラム・デザインを行うことこそ、最も重要なのではないかということである。私は、安直な精神論を唱えているのではない。極めて現実的、具体的に、実効性のある論を展開して来たつもりである。先に挙げた3校の例を見ても、軸足にしっかりと体重をかけてカリキュラムをデザインし、生徒たちの日常に根を下ろした実践を行っている。

それぞれの私学が、建学の精神を具現化するために、独自性のある豊かなカリキュラムをデザインされ、もって生徒たちの QOL を高める教育に邁進されることを願いつつ、本稿を結びたいと思う。